

梅鶯仏教壮年

第32号
2006年
3月5日

定期総会開催

期日 3月18日(土)

午後6時より

* 本年は新しい役員を選出する大切な総会となります。
会員の皆さまは是非ご参加願います。

法輪寺HP開設

法輪寺のホームページを開設致しました。
梅鶯仏教壮年会の会報記事や行事予定も掲載しております。

一度是非アクセスしてみてください。

<http://hourinji.seesaa.net/>

○住職挨拶 ○法輪寺について ○梅鶯仏教壮年会住職法話 ○梅鶯仏教壮年会寄稿 ○会報記事ひろいよみ ○ここにひびく詩 ○寺院行事予定 ○梅鶯仏教壮行事予定 ○莊嚴山法輪寺縁起 他

梅鶯仏教の3年を振り返って

副会長 北村 幸雄

振り返りますと、2003年6月1日に梅鶯仏教壮年会第1回総会に参加させて頂いた以来、この6月で満3年になります。本来早いもので思う反面、仏教に全く早いもので思う反面、無かった私が、これほど縁の無かつたことに正直驚いてます。多分、例会等への出席率は90%くらいになるはずですが、自分自身が一番びくつきして、自己設定は、無理のないスケジュール、設定と、毎回、尽きぬ話題を設け、十分な準備をして下さった、ご住職の努力のたまものと感謝しております。

勉強会というより、毎日が仏教にまつわる様々なお話を聞き、また、気負いなくしゃべれる自然体の集まりには、雰囲気自分合います。

さらに、これまた無理せず自然体で参加されてくる会員方々とのふれあいや、大きな会場の思います。

参加が一つの大きな喜びです。この文章を書いた。



にあたり、あらためて過去の会報を見させていたため、発行され実に見え、3回にわたって発行され、写真入りカラーで、3段組や4段組の紙面は、再読しても読み甲斐があり、その時々のお話や気が思ひ出され、あらためて思いあつたことが、あります。

聞こえたお話を、一回で覚えきれない不肖の会員である私にとつては、この会報は大切な財産となつて、います。

参加させていたたく前には、仏教やお寺は、ちよつと遠く存在であり、けなげなもので、ない近づく、けなげなもので、存在は高き、けなげなもので、強しなけなげなもので、自分の考え、方、レベル、少しづつ自然に身に付いていければよいと、考えるようになりまし

信じねば不幸になるとか、たりが不幸になるとか、お金を出さな

いと不幸になるとか、お金を出さな

今までおかしいと思つて、浄土真宗では一切逆



題材法話

＊前号からのつづき

○「無称光」Ⅱ
讃えきれないはたらき

にそんなことに執着するこ
との愚かさが、説かれてい
ることが分り、それは大変
新鮮な驚きでありました。
浄土真宗の教えとは、実
は、ちつとも古くさくはな
く、むしろ今の時代にあつ
たり当てはまる教えである
と考へ始め、このことも今
まで続けることができた要
因でありました。
とは言い、まだまだ序の
口にいる私です。これから
も無理をせず、皆さんと楽
しみながら続けていきたい
と考へております。
ご住職をはじめ、会員の
皆様方、これからもお世話
になります。
いします。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「いま」という
「いま」なる時は

「ま」の時は来れば
「い」の時は去る

津本陽の小説の中で見つ

けた古歌です。一瞬
々々の時を大切に生
きなければと改めて
感じます。



く、つまりほめたくないのではな
く、ことができない「映画監督
くせない」の「映画監督
が、山田洋次という映画を見
終えた時には、良い映画も話
たくなき朗々たる映画の
も誰かが朗々たる映画の
感想を述べ始めたり全
く逃げ出したと仰つてい
ますね」



ました。
ま本に深い感動に出会っ
たときには、言葉を失うも
のでしようし、言葉で称讃
することなどできないもの
だと思ひます。
最大の問題を解決してくだ
さる、阿弥陀様との出会い
は、言葉でほめ讃えること
などできるはずがありません。
それが「無称光」という
ことです。

○「超日月光」Ⅱ
日月をも超えた光

最後に、「超日月光」で
す。これは文字通り、阿弥陀
様の光は太陽や月の光さえ
も超えたと讃えられるので
す。
「さんだんのうた」とい
う歌の中で、
月日のひかりかげかくし
宝の玉のかがやきもくし
みなことごとく覆われて
さながら墨のごとくなり
と、詠われていま
す。
闇の中にいるも



のは闇の中であることさえ
も気付きません。
闇を照らす光によって初
めて闇が闇であると気付く
のです。
無明の闇の中で煩惱にさ
まよつていたこの私が、ご
本願という教えの光に出会
い、闇そのものである私の
真の姿が照らし出され、存
念仏を称える身を悦ぶ存在
に育てられたのです。
太陽や月の光は、この地
上において偉大な存在であ
り、その恵みは計り知るこ
とができません。
阿弥陀様の光のほたるき
る、阿弥陀様の光の授ける太
陽や月の光さえも、はるか
に超えるものであると讃え
られてゐるのです。
以上、これまで十二の光
を3回の例会にわたって味
わつてきました。
は、その阿弥陀様の十二の光
（照塵刹）、全ての生きとし
生けるものは、この阿弥
陀様の光の中にある（一切
群生蒙光照）というご文で
締めくくられています。